

ナマステ

特定非営利活動法人
自然文化誌研究会 会報誌



137号
2019年9月10日発行号

「こすげ冒険学校」「やまめ・いわなキャンプ」無事終了です！

前半の「こすげ冒険学校」は例年になく晴天に恵まれました。もちろん夕立はあったものの、涼しさを迎えるためには必要な自然現象でもあります。後半の「やまめ・いわなキャンプ」は、初日の13日は川に入れたものの、あとの2日は雨キャンプとなってしまいました。参加者、保護者のみなさま、スタッフのみなさまおつかれさまでした！参加者のみなさまには、写真と動画をCD-Rで送りますのでぜひご覧ください。次号で、プログラムをはじめ、詳細を掲載します～！！

(事務局)



＜参加者からの声＞

冒険学校は初めて参加しました。知っている人が少なかったため、最初は不安でしたが、みんなで川で遊んだり、ご飯を食べたりしているうちに、いろんな人と仲良くなりました。

僕は、竹細工で、水筒と孫の手を作りましたが、かたい竹をのこぎりで切るのは力がいって大変でした。でも、切り方を工夫したり、なたなど他の道具を使い分けたりするうちに上手に切れるようになりました。出来上がった作品は友達と見せ合いました。夜は、懐中電灯の明かりだけを頼りに虫取したのも楽しかったです。コクワガタやミヤマクワガタ、それ以外にもたくさんのお虫がいてわくわくしました。

楽しい思い出をありがとうございました。また来年も行きたいです。

山本海凜くん（小学4年生）



■ 活動案内 ■

その1 「INCH(祭り)ライブ2019」 9.21~22(1泊・日帰り)

秋の一大イベント「INCH 祭り」を開催します！ログハウスのあるキャンプ場で、「INCH ライブ」を開催します！ライブをBGMに、のんびりとお酒、お茶でも飲みながら過ごしませんか！！音楽を愛する方は楽器持参で、腕に自信のある方もない方もぜひぜひお越しください♪ 音楽しない方はのんびりしてても、もちろんOKですよ～♪

毎年おなじみのバーテンダー「ひでやん」もバーを開きます！！



■日程 9月21日(土) 16:00 開演
～22日(日) 日帰りもOK

■会場：小菅村のいつものキャンプ場

■対象：子どものみの参加はできません。

■費用：日帰り 1,000円 宿泊 2,500円 食事付

■BARはカンパ制です。

■交通機関

※小菅村までの交通は自力になりますので、よろしくお願いいたします。バスの時間などをご相談ください。

■お申し込み：ライブの当日参加はOKです。楽器を持ってお越しください。



その2「冒険学校 まふゆのキャンプ」 12.26~28(2泊3日)

毎年恒例の冒険学校「まふゆのキャンプ」を体験して、暖かいお正月を迎えませんか？小菅村ではお正月の準備がもうはじまる頃です。日中は、村内を自由に動き、村の中でもちょっと面白いところに行きましょう。焚火・薪割り・ナイトハイク・星空観察・バードウォッチング・滝探検・・・その場で思いつく限り、いっぱい遊んで、食べて、寝る。そんなキャンプです。個性あふれるスタッフがみなさんの参加を待っています！

日 程：12月26日(木)～28日(土)

場 所：小菅村のいつものキャンプ場

宿 泊：テント・ログハウス・野宿など

対 象：小学校3年生～中学校3年生

定 員：25名(先着順です)

参加費：会員¥26,000 非会員¥28,000

(奥多摩駅からの交通費・食費・宿泊費・保険代などが含む)

申込み：ハガキ・もしくはE-mailに住所・

氏名・年齢(学年)・性別・電話番号を記入の上、

11月23日(土)までに事務局まで参加をお伝え

ください。



この事業は平成31年度 国土緑化推進機構「緑と水の森林基金」の助成を受けて開催します。

『INCHの楽しい仲間たち』 vol.7 その17

『冒険探検粉塵記 第17話 ポンチャン冒険の始まりの再発見』

駄作者 文福洞先斗

ポンチャン（ぼく）の冒険は伊豆半島への野宿旅行から始まりました。この旅の意味は、今になってやっと分かったことなのですが、小説よりもはるか奇なることに、三人の立派な先達の事績が伊豆半島で地理的かつ心情的につながったのです。

静岡県立有用植物園

大学に入学したばかりの1968年の夏、学生サークル児童文学研究会の合宿が伊豆の松崎の寺で行われました。ぼくは高校生の時にたくさん小説を読んで、小説に飽きていたので、大学生になってから童話に興味を移していたのです。合宿前日に、2年先輩の細川さんが土肥の網元の家の出だったので、土肥の海岸で男子学生4人だけでキャンプをしました。研究会の合宿終了後、ぼくは黒田君と伊豆半島を巡る野宿旅行をしました。ある神社の社殿の軒下で寝ていたら、深夜、白猫が走り去ったので、民俗的恐怖を覚えました。翌朝は、東海バスの始発で、県立有用植物園に古里和夫先生を訪ねました。早朝、開園前にもかかわらず、園長自ら快く、礼儀知らずの若者を案内してくださいました。

当時、ぼくは大学裏の里山にアケビを見つけて、その実のおいしさと形の奇妙さに感動して、バナナのように食べられる種無しアケビを作ってみたくなったのです。そこで、まず練習として種無しスイカを作るを試みました。2倍体のスイカの苗にコルヒチンをつけて4倍体にし、元の2倍体と掛け合わせて3倍体の種無しスイカにするのです。大学キャンパスのはずれの山林地に焼畑を造り、スイカを育てていました。もちろん、理学部の近田先生の許可を得て行ったことです。このことをお話したら、古里先生からスイカの花粉を所望されたので、花をお送りした記憶があります。

夏休みに、同級生の藤村君と久保さんは三島市にある国立遺伝学研究所でアルバイトをしていて、同じく大学闘争に飽きていた私に同研究所の阪本寧男先生を紹介してくれました。彼はエチピアの海外学術調査から戻られたばかりであったので、2度ほど大学で講演をお願いしました。貧乏学生の私たちは何のお礼をすることもできず、考えすら及ばなかったところ、和田先生がフォローしてくださいました。

また、当時は知りもしなかったのですが、古里先生との知遇によって、ぼくは国立遺伝学研究所の阪本師の弟子になることができました。最近の手紙（2019）に、古里先生の推薦がなければ、ぼくを受け入れる気はなかったと書いてありました。彼は木原均 {注：パンコムギの起源を明かした世界的に高名な遺伝学者} の最期の助手であったのですが、当人が自称するように相当の天邪鬼だから、弟子などはもたないと考えていたのでしょう。失礼ながら、孤高の農学者とまで称されたように、世間とは相当ズレていて、旧制中学校生で経験した戦中および敗戦直後の体験によって世俗の名利にはそれなりの反感を持っていたのだと邪推します。彼の薫陶を受けたお陰で、人見知り強く、世間に疎くいたかったぼくの性癖はさらに助長されました。

この体験は彼の人生に大きな心の傷を与えたようで、ごく最近の手紙にも食料の買い出しで経験したいやな思い出を重ねて追加記述してありました。京都近郊の農家は、京都人が持ち込む高価な物品としか、食料を交換してくれなかったそうです。したがって、地元民は配給が不足するときは、遠くまで食料を買い出しに行かなければならず、うまくサツマイモを入手できても、警察に取り締まられて没収されてしまうのです。

ぼくの祖父の実家は稲作農家で、濃尾平野の木曾川のほとり、輪中の中にありました。一大稲作地帯ですから、ここから親戚として戦争中も食料は分けてもらっていたようですが、それでも敗戦後には、もらってきたイネ米も警察に闇米として没収されたこともあったようです。この祖父は徴兵されてシベリアに出兵し陸軍上等兵で、父も戦争末期に徴兵されて、呉の海軍新兵で敗戦を迎えました。名古屋市は焼夷弾で焼き尽くされ、その恐怖は祖母や母から聞かされたところです。名古屋市の道路が広いのは、爆撃で街が破壊し尽くされたので、新たな都市計画の線引きが容易だったからのようです。

さて、ぼくは7月いっぱい自動車運転を止めることにしたので、廃車にする前に伊豆半島を巡ることにしました。2019年6月に吉奈温泉に2泊して、南伊豆を走りました。事前に旅館の人に、観光ガイドに載っていなかった県立有用植物園について聞いたのですが、要領を得ません。その際に、インターネット検索をしたら、研究報告の記事はあるものの、植物園の存在は不明でした。帰宅後、さらに詳細に検索したところ、1950年に南伊豆町石廊崎に開設された有用植物園はたびたび改称されて、今では南伊豆亜熱帯公園として一般公開されています。いく人かの個人史が不思議なことにぼくの興味と結びついたので、7月にもう一度吉奈温泉に泊まって、沼津市西浦の興農会農場跡を訪ねました（写真）。

日本村塾教育

ぼくは植物と人々の博物館の読書会として、日本村塾セミナーを提唱しているので、時々ネット検索をして、日本村塾の内容確認をしていて、『日本村塾教育』（1935）という本があることに気が付きました。著者の大谷英一はクリスチャンで、太平洋戦争が始まる直前の1935年にこの本を書いています。この時代に、よくぞ書いたものだと驚くような内容で、現在のぼくの考えにととても近いように感じました。

大谷の略歴は次の通りです。九州大学農学部で農業経済学を学び、1931年に文部省嘱託としてドイツとデンマークに留学、帰国後、伊豆半島の久連（原沼津市西浦）の国民高等学校の経営にあたり、1937年、インドで開催されたYMCA世界大会に日本代表として出席しました。戦争中に、当局の圧力があり、それに屈して大政翼賛会に協力したことを悔いて、敗戦後の1946年に校長職を辞して郷里の栃木県に戻りました。その後も、地元で農民教育に尽くし、矢板市の第4代市長（1974～88年）になったようです。大谷の著書『日本村塾教育』は国会図書館で複写してもらい、読了後に、インターネット検索で見つけて、関連した古本『新興村論』（1936）、『平和の國デンマーク』（1948）とともに3冊を購入しました。しかし、『日本村塾日記』（1935）は見つかりませんでした。

そもそも、日本村塾教育の実体は昭和初期に静岡県田方郡西浦村久連（現沼津市）にあった興農学園、久連国民高等学校のことでした。デンマークのキリスト教主義に基づくフォルケホイスコーレ *folkehøjskole* / *folk high school* を模範として、久連に農場を所有していた渡瀬寅次郎の遺言で、遺族の資金提供により、彼の札幌農学校における旧友、内村鑑三や新渡戸稲造らが協力して、1929年に設置されました。初代校長は平林広人で、青年を対象に共同生活のなかで、農民の実生活に即した教科・実習が行われていました。

1933年に財団法人興農学園となり、久連国民高等学校と改称し、大谷英一が二代目校長になりました。豊かな農業国デンマークの理想を求めて、全国から総計約200名の生徒が集まり、柑橘栽培の研究、講習会開催などをして、地域にも貢献していたようです。ところが、第2次世界大戦が激しくなるにつれて、政府から国粹化の圧力を受けて、1942年には農道塾と改称し、1943年には実際の教育活動は停止しました。敗戦後、大谷は興農学園を再興することなく、故郷の栃木に戻りました。その後を受け継いだのが古里和夫で、1955年からしばらく柑橘の研究や海外の樹木、コルクガシやエリカなどの保存・公開を行っていたと言います。

人々をつないだ心と場

古里先生の経歴について書かれた文献は国会図書館で探しました。古里先生は興農学園農場を継いで、その後、上記の静岡県立有用植物園長、浜松市のフラワーセンター長を順次歴任されていたのです。ぼくが出あったのはこの頃で、1968～1969年のことでした。彼は1912年に岐阜県で生まれ、千葉高等園芸学校を卒業してから岡山県で女学校教員、1940年に京都帝国大学農学部（木原均研究室）を卒業、南洋興発株式会社で研究開発・農場経営、敗戦後フィリピンから帰国、1946年に木原生物学研究所研究員、同年に興農学園長になり、1954年に国立遺伝学研究所研究員、1960年に柑橘類の細胞遺伝学的研究で農学博士、1961年に静岡県立有用植物園長、1971年に浜松市フラワーパーク公社公園長、1993年に永眠されました。この間に、ハワイ、北アメリカ、ポルトガル、カナリー島、マディラ島、南アフリカ、南アジア、オース

トラリア、ニュージーランド、中央・南アメリカ、中国などで、有用植物調査を行ってきました。

ぼくはほんの2、3回お目にかかっただけだけれども、こうして略歴を見ると、木原学派の流れで同アカデミック・ファミリーであり、つくづく冒険人生の出会いの不思議さを知り、多くの方々の支えられて自由な生き方ができたことに、改めて感謝の念を強くしました。

デンマーク国の話

興農学園の創業を求めた渡瀬寅次郎はクラーク博士の直接の薫陶を受けてクリスチャンになり、その後、種苗会社で成功しました。彼は晩年、キリスト教の教えを基礎とする農学校を創立したいと願い、遺言で内村鑑三らにこのことを託しました。内村は札幌農学校での一年後輩であったからです。渡瀬がデンマークの農学校に思い至ったのは、デンマーク研究者の平林広人のラジオ放送「丁抹の文化について」を病床で聞いて共感したからで、一方、平林はデンマークの国民高等学校を日本に創りたいと考えていました。平林が銀座教会で内村に会った際にその想いを聞き、内村は賛成して、彼を渡瀬に紹介したのです。

日本村塾教育の思想は内村鑑三の著書『デンマーク国の話』（1913）の影響を強く意識していました。さらに、その大元にはグルントヴィ（N.S.F.Grundtvig）のキリスト教理解があり、農民が高い学問を身に付けなければ、民主主義は衆愚政治になると考えて、ケンブリッジのカレッジをモデルとした「生のための学校」を求めたのだそうです。生きた言葉で語り合い、それぞれの生を深めていくことが目的であれば、資格や試験、単位などは不要だとグルントヴィは考えた。デンマークの国民高等学校は1844年に最初の試みが始まった。内村は平林からデンマークのことを多く学び、彼にこの世でなすべき最後の仕事である興農学園を託して、1930年に他界しました。

イギリスのケンブリッジ大学のカレッジをモデルとした「生のための学校」を求め、生きた言葉で語り合い、それぞれの生を深めていくことを目的とし、資格や試験、単位などは不要というグルントヴィの考えは、ぼくの日本村塾 Nihonmura College for Environmental Studies の基本姿勢とまったく同調・共鳴します。ぼくは、日本ではもうさっさと受験教育をやめて、幸せに生きる学びを求めてほしいと考えています。自然文化誌研究会とともに行った40年以上の環境学習実践にもとづいた考察により、単なる環境教育の原理の到達点ではなく、現代の人々の生涯学習の統合原理として環境学習原論を提案しました。

しかしながら、日本村塾の3ゼミ（民族植物学、扶桑・、自給農耕）への参加者はほとんどいませんので、実際はウェブ上の塾になっています。日本では資格が得られる学校でなければ、教育や学習は認知されないということで、学校化社会は極まって固定してしまっているのです。自主独立した学びの場はほとんど成立しないのです。ただし、自然文化誌研究会の冒険学校はほぼ常設化して、山梨県小菅村で継承されているので、少数の子供たちに対しては役立っているのだと思います。（詳細内容、文献などは、ホームページのエッセイに記載しました。）2019-7-22



興農学園農場跡の石碑と西伊豆から駿河湾を望む

『藤農便り』 第18号

宮本茶園 ヘルミッシヨネルズ宮本

今年は梅雨明けが7月29日、梅雨入りから7月中旬まで低温・雨降りの梅雨寒が続きました。久しぶりに1993年の冷夏を思い出しました。その年の5月交通事故で、左腕開放骨折全治3ヶ月の大怪我をしました。ギブスがとれ出勤したいと職場に連絡すると、教頭から「2学期が始まるまで来なくてよいから、療養休暇が終わってもゆっくり静養するように！」と言われました。当時の学校は長期休業中の自宅研修が認められ、出勤の義務はありませんでした。言葉に甘え、特殊教育科の友人が就職した仙台へ七夕見物に出かけました。8月上旬でも東北地方の水田は稲がほとんど生長しておらず、秋に収穫できるのだろうかと感じた記憶が鮮明に残っています。

神奈川県に転職した頃の思い出ですが、新採用の勤務校が県立平塚養護学校でした。6月末に元同僚からメールが届き「教え子の木村英子さんが参議院選に出馬する」とありました。添付資料をみると木村さんは養護学校卒業後に施設入所せず、国立市で自立生活を始めたそうです。同時期私は特殊教育科のクラス仲間と活動した特殊教育研究部で、三多摩地区の自立する障害者介護に取り組んでいました。彼女の考え方はサークル活動を通してよくわかったので、微力ながら選挙を応援しました。街から離れた山暮しで特殊研究部の昔仲間や親しい友人に電話して投票依頼する事位しかできませんでしたが、木村英子議員誕生に役立ったと密かに喜んでいます。

・2年目の佐野川茶

4月28日遅霜がありました。前夜純子さんと呑み会で、帰宅する夜道は無風で満天の星空です。ほろ酔い気分で瞬く星を眺めながら、遅霜の嫌な予感がしました。朝目が覚めて雨戸を開けると、やはり屋根は真っ白です。朝食も取らず作業着を着ていると、小池顧問から電話です。「遅霜だ！茶畑に行ってみろ」「今着替えて出かけるところです」とだけ話し、軽トラに飛び乗りました。畑に着くと、まだ小さかった新芽は霜にやられて赤茶けています。連休中でしたが木村普及員に連絡すると「部員茶園の被害状況を写真に撮って送ってください」と指示されました。新年度藤野茶業部総会で私は役員になったのですが、役員最初の仕事が遅霜被害状況確認と報告でした。佐野川中を走り回り、慣れないスマホで写真撮影しメールに添付して送信、ぐったり疲れた一日でした。



連休明けに木村普及員の茶園巡回指導があり、茶園ごとに対処法が指示されました。私の茶畑は被害が大きく、「葉層の薄い茶園は収穫が見込めないの、更新を考えているならすぐに整枝して春肥の栄養を新しい芽に使った方がよい」と指導されました。茶園巡回指導後に開かれた部会では各農家茶園の生育状況を踏まえて摘採日程が検討され、最も効率の良い摘採・集荷・搬送方法を考えました。茶の品質は一芯二葉が最適な時期に摘採し、いかに早く（目安は3時間）茶園から荒茶工場に運んで蒸す事が最重要です。今年は大きな茶園の収穫は複数の摘採機を使い、また地区毎に作業日をまとめ効率よく集荷・搬送できるように摘採日程を決めました。足柄茶用に県農協茶業センターへ出荷する茶葉は5月11日～16日、佐野川茶に加工する茶葉は5月20日～28日に収穫、全ての茶園で摘採・集荷から蘆川荒茶工場搬入までを3時間以内に行うことができました。

遅霜被害は甚大でどの農家も収穫量は激減ですが、足柄茶用茶葉収穫から日数を置いたので佐野川茶加工用茶葉は前年度部会で決めた量を確保することができました。煎茶加工は木村普及員の紹介で、藤沢市にある日本茶専門店「茶来未」にお願いしました。茶来未は昨年までお世話になった高梨茶園同

様高い技術で製品加工してくださり、素晴らしい佐野川茶が出来上がりました。

新茶第一陣は6月13日納品、今年も14日に開催された上河原ホテルの里祭りでお披露目することができました。JA 藤野支店の店長以下茶業部役員総出で出来立ての新茶をお客様に振舞い、用意した製品はたくさんの方が購入してくださいました。第二陣からはパッケージにJA 神奈川つくい「神奈川つくい」と佐野川の茶畑風景が選定された「にほんの里 100選」が入りました。年間を通して販売いたしますので末永くご愛飲ください。



・夏の茶仕事

木村普及員の茶園巡回指導を受け、葉層の薄い茶園は5月8日に下側半分を更新整枝しました。上側半分は収穫後に整枝したのですが、7月上旬の茶園の様子です。下側半分は新芽が出て緑色の若葉に覆われ、上側半分ははまだ芽がなく枝ばかりです。わずか数週間の違いで素人が見ても明らかに生育

に差が見られます。木村普及員の指導の意味を実感する光景です。



収穫後はひたすら草取りです。特に新しく借りた再生茶園は昨夏雑草に覆われ悲惨な状態だったので、負けないよう努力しています。6反に増えた茶園は中途半端な気持ちで管理はできません。除草剤を使わないでどこまでできるかわかりませんが、秋まで全力を尽くします。

藤野茶業部の活動では、6月5日小池顧問の茶園の茶葉を使い農業技術センターで粉末茶製造研修をしました。佐野川では一番茶を収穫した後の葉は刈り捨てているだけなので、煎茶加工に続く製品開発が急務です。私が利用するてくてくのパンやまあさの家のお菓子には粉末茶が使われているので、業務用粉末茶の潜在的需要はあるはずです。佐野川茶の特色を生かした粉末茶が完成すれば、茶産地の新たな茶製品作りにつながると思います。7月12日長雨で実施できなかった夏整枝講習会があり、月末までに全農家の整枝作業を終えることができました。上岩の荒廃茶園再生にも継続して取り組んでいます。梅雨明け直後の31日、部員総出で草刈りと整枝作業を行いました。一年前茶樹が雑草で覆われ密林のようだった茶園はすっかりきれいになり、地道な努力は確実に成果を上げています。秋に施肥・製枝すれば、来年は収穫できるかもしれません。



・藤野クラフトビールホッププロジェクト

昨春和田にある旧神奈川県立陣馬自然公園センター施設内に藤野クラフトビール醸造所「Jazz Brewing Fujino」が開業しました。オーナーの山口さんは私と同じ移住者で、子育てのため都内から藤野に引っ越してきたそうです。純子さんを通して知り合いになり、ビール原料に佐野川茶を使っています。彼はビール原料に地元農産物をこだわり、ユズやハーブのビールも製造しています。

今年2月原料のホップを藤野で栽培しようと、ピオ市事務局土屋さんの呼びかけでホッププロジェクトが立ち上がりました。私もメンバーとなり活動に取り組んでいます。ホップの苗作りは意外に難しく、春に山口さんから渡された3品種の発芽率は0%でした。育苗と併せて、上岩茶畑の一角に委託された苗を植え付けましたが、元気に育ち今では小さな実を付けています。もっか栽培方法を勉強中ですが、将来は和田茶畑下側の休耕地をホップ園にしたいと考えています。和田茶畑はクラフトビール醸造所から700m、歩いて数分の距離です。陣馬山の登山者が「にほんの里100選」茶畑とホップ園の景観を楽しみ、醸造所で出来立てビールを飲んでお土産に佐野川茶を購入する。今は夢ですが、数年内に実現できそうです。山口さんには佐野川産雑穀でビールを作るよう営業活動していることも付け加えておきます。雑穀ビールは雑穀街道名物になる事間違いありません！



・ちーむゴエモンの活動2019（稲作）

冒頭で紹介した平塚養護学校の元同僚が小嶋倫子さん。彼女から「宮本さんの知り合いから味噌に仕込む大豆が買えないか」と連絡があり、千木良の高橋さんを紹介するために4月29日イネの播種作業へ誘いました。彼女は定年退職後福島原発事故放射能汚染被害に苦しむ子どもたちの保養に取り組む、地域活動にも熱心なのでゴエモンと交流できれば保養の輪が広がると思ったのです。小嶋さんは無事津久井在来大豆を購入、保養の様子や麹や味噌作り等いろいろおしゃべりでき、お互いに有意義な情報交換ができたのではないのでしょうか。

6月の田植えは用事があって欠席でしたが、8月6日田の草取りに参加しました。強い日差しの中、水田は意外に涼しく2時間程で作業を終えることができました。大きな雑草はほとんどなく、高橋さんの几帳面な水田管理が伺えます。一番大変だったのはモグラの掘った穴から流れ出る水を止める作業でした。お土産にゴエモン小麦で作ったウドンをいただき、おいしく食べさせてもらっています。





・雑穀街道普及会

5月になると麦がきれいに穂を出しました。初夏のさわやかな風にたなびく麦の穂波は、見ているだけで心が豊かになります。土寄せを小まめにしたせいか、雑草も大きくなりませんでした。6月中旬、刈り取り準備を始めていると田村さんが畑に来られ「粒を潰してみろ、こんなに柔らかくては収穫できないぞ。穂が垂れ、粒が固くなり中が真っ白になった時が刈り時だ」と教えてくださいました。小麦収穫は6月26日、もち麦収穫は7月11日でした。脱穀も機械を貸してくださり、手取り足取り作業を指導していただきました。初収穫の麦は虫がわかないよう天日干ししています。製粉したら土屋商店を通して販売いたします。



昨年は半分の面積しか作付けできなかった雑穀畑ですが、栽培量を増やし雑穀見本園を作りました。見本園はなかなかイメージがわかず、小菅村を訪ね木俣師の畑を見学しました。一番茶収穫が済むまではなかなか時間が取れず、植え付けは6月14日、上河原ホタルの里祭り開催日でした。モチキビ・モチアワを各一畝、見本園に木俣師からいただいたセンニンコク・シコクビエ・オカボ・ウルチアワ・ハトムギ・キヌアを播き、ホタルの里祭り会場に駆けつけました。6月下旬から津久井在来大豆・借金なし大豆を播種、モロコシ・甲州モロコシ苗を定植して一反の植え付けを終えました。今は草取りと土寄せをしながら防鳥ネットを張る準備をしています。



木俣師と純子さんは相模原市緑区と雑穀街道の世界農業遺産登録申請について交渉しています。詳細については木俣師から配信される「植物と人々の博物館メルマガ」でご覧いただけますが、7/28付に「相模原緑区では雑穀街道を世界農業遺産に申請する方向で、4年間の普及啓発計画を立ててくださいました」と報じられています。上岩の雑穀畑は活動拠点になっていますので、いつでも見学にお越しください。

*興味ある方はヘル宮本までご連絡ください。
Tel: 090-2205-8476 (宮本透)

『INCHの楽しい仲間たち』 vol.8 その8

ニュージーランドで湯治（その2）

佐伯 順弘（岐阜県）

ニュージーランドの北島にあるオークランドに到着した後、バスでファンガレイに向かった。ファンガレイで一泊した後、日帰りでその近くにある「カウリ」という巨大樹木を見に行った。

ファンガレイでもう1泊した翌日、次の目的地に向かった。



DAY4 (11AUG2013) ファンガレイから温泉地であるロトルアを目指す。

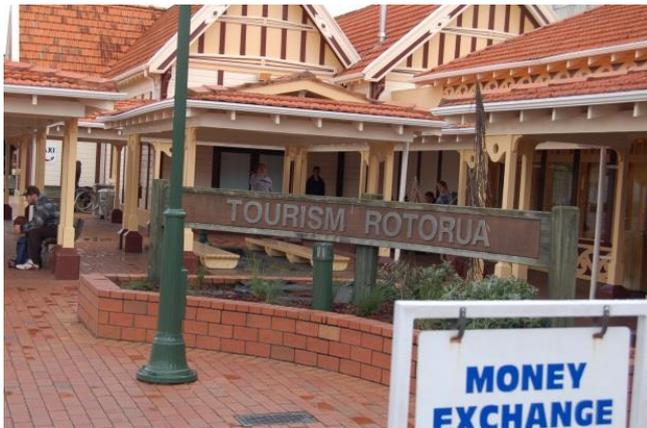
0700 起床 0800 朝食（昨日買ったチーズパン1つ、ヨーグルト、コーヒー）を素早く済ませます。0830 チェックアウト。ロッジの人がバス停まで車で送ってくれるという。ありがたい。キーデポジット 20NZ\$戻る。

0915 オークランド行きインターシティバスに乗る。34NZ\$。バスは広々快適、しかも日本のバス特有のバス臭さはない。



1150 オークランド着。ここからロトルア行きのバスが出ているはずとなんとなく信じていたので、なんとなく探してみると、やはりあった。オークランドは中心都市でロトルアは温泉地なのだから直行バスが出ていないわけがない。というわけで、かなりの僻地でない限り、行きたいところへの交通手段は普通にあるものだ。しかも運よくロトルア行きは1300に出発だという。まるで計算したかのような素晴らしい行程である。30.5NZ\$でバスチケットを買い、水を手した。ロトルアまでは4時間ほどかかるらしいが、別に急いでいるわけではないので問題はない。しかも、バスの旅は快適だ。今までに何度も書いたが海外のバスはほとんど快適である。日本のバスはその車内の臭さ、吐き気を誘発するショックアブソーバーの設計思想が一向に改善されない。そしてなにより座席の狭さ。何年前の日本人の標準体型を基準にしてシート及び車体を設計しているんだか。日本人にも体のでかい奴が増え、そうでなくても体の大きな外国人だって日本に観光に来るのだからいい加減根本から見直してほしいものだ。それもせずにおもてなしなどとは噴飯ものである。（ちなみにこの噴飯ものという言葉だが、正しく使える日本人は半数に満たないらしい。他にも「流れに棹（さお）さす」「役不足」「気が置けない」も正しく使えないとのこと。いと情けなし。まあ、どうでもいい。）とにかく、観光のフットワークを向上させるはずのバスが、30年前の中国や20年前のパキスタンのバスにも劣るとするのは技術立国日本、おもてなし大国日本に属する者としては大変残念である。但し、夜行バスについてはかなりの質の向上が見られるため、大変満足しているので除外する。（バスタ新宿と美濃加茂を結ぶ路線の夜行バスは大変快適である。しかし、美濃加茂のバス停は山の中であるため最寄りの駅までは20分以上歩かねばならない。これは高速道路SAを利用しているからで仕方ないと言えれば仕方ない。歩けばいいだけの話である。しかし、美濃加茂市も地元

タクシー会社に委託したコミュニティバス網を拡大中なので、高速バス停の問題も早晚解決するはずである。) そんなどうでもいいことを考えている内にバスはハミルトンという町で休憩。バスターミナルというか、ドライブインのような感じの施設で、トイレを済ませたり、水や軽食を買ったりという具合に過ごす。20分くらいして、客がバスに戻りバスは出発した。



1650 ロトルア着。そこから歩いてすぐのところに今夜の宿がある。



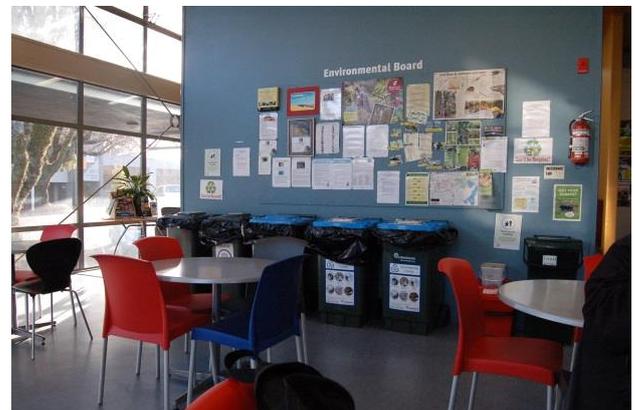
1700 YHA Rotorua 着 1泊25NZ\$。2泊分支払う。やはりユースホステルはいい。エジンバラもロンドンもここロトルアも快適だ。独立系ホステルも悪くないが YHA のホステルは共通する安心感がある。学生の時、相部屋の寮で生活していたから「戻ってきた感」があって落ち着く。今回の部屋は2段ベッド3つの6人部屋。指定されたベッドが自分のエリアだ。下の段を取ることができたのでベッド下に荷物を置く場所を確保できた。

基本、寝るだけの部屋なので人がいっぱいでも気分が落ち着かないということもない。朝も同じ時間に起きるわけではないため、顔を合わせないことすらある。もちろん、顔を合わせれば、友好的に挨拶を

交わす。



シーツは清潔でベッドの固さも申し分ない。室内は適度に乾燥しており、程よく暖房されていて大変快適である。



ダイニングは清潔でゴミの分別など環境に配慮したルールが徹底している。



キッチンも広々としている。コンロがいくつもあり、各人が待つことなく自分の料理を作ることができる。また、責任をもって片付けることが徹底されている。監視されるとか注意されるとかいうのではなく当たり前のことなのである。したがって、どこのユースホステルもキッチンは整っている。今回は使わなかったがコインランドリーもあり、荷物を少なくして長期間旅をするときには大変ありがたい。

あっという間に夕方になったので、外に出る。



歩いてすぐのところにある湖。なかなかよい夕暮れだった。そのまま、辺りを散策して夕食をどこにするか考える。するとそこで目に入ったのは、様々なビールの銘柄の看板。即座にそこに決めて中に入る。8月だがニュージーランドでは冬である。あまり、外にいたくないのだ。さっそくエールビール9×2 とポークリブ 23.7、F&C23.7、計65.4NZ\$をオーダーする。



旨し。やっぱりリブは手づかみで骨から肉をはがすようにかぶりついて食べるものだ。骨の近くの肉のうまさに気づいていない人が少なからずいるのは大変残念なことである。食事は正しいマナーで楽しみたいものである。例えそれが手づかみで手がべとべとになるものであったとしてもだ。(ちゃんとレモンスライスを浮かべたフィンガーボールは用意されていた。)

満腹した後、明日の朝食用にシリアルと牛乳とコーヒーを買って帰る。

DAY5 (12AUG2013) 湯治

0800 自然に目が覚めて起床。昨日買っておいた食糧を朝食にする。このユースホステルは1泊

25NZ\$ (約 2125 円) で朝食を付けていないので、自分たちで用意する必要がある。冷蔵したいものは名前と日付を書いて共用の冷蔵庫に入れておく。盗まれたりしたことはない。



簡単な朝食を終えたら、洗い物をして今日の探索に出かける。道を歩くとあちこちから湯気が立ち上っている。火山活動が活発な島であることを再認識させられる。



中には住宅の庭に吹き上がっているところもあった。吹き出すに任せている感じだが、自分だったら熱交換器を設置してお湯を作って利用するか、簡易的な地熱発電所を作ってしまうのにとエネルギーの無駄を残念に思う。もしかしたら、頻繁に噴出場所が変わるのかもしれない。

そのまま歩いて、大通りに出る。マツダ、スズキ、日産、ホンダの看板が並び。ここは日本か？そして、向こうには・・・。



ウェンディズ、マクドナルド、バーガーキングが並んでいた。最近の海外旅行で感じるのは、マクドナルドよりバーガーキング=BK を目にする機会の方が多いということ。世界シェアはBK がとったか？個人的にはBK が好みである。



1100 早めの昼食をかわいそうなくらい人がいないBK で済みます。2.5NZ\$ (212.5 円)



1140 レインボースプリングスという動物園にたどり着く。中には魚類、鳥類などが展示されていた。特に爬虫類、トカゲの仲間がかなり多く展示されていた。

さて、そろそろ今回の重要なミッションである湯治に出かけるとしよう。



バス網は割と整備されているようで、使い勝手がよさそうだ。冬とはいえ、よく晴れてそれほど寒くはない。2.5NZ\$ で市中心部へ向かう。



1325 あっという間に到着ポリネシアンSPA。ここでゆっくりと温まるのだ。何度も確認するがニュージーランドは8月が冬だ。今は寒いのだ。



1610 いい湯だった。いくら水着で入る温泉だとしてもそこで写真を撮るわけにもいかなかったのだ。温泉というか温水プールがいくつもあり、温泉に入りに来たのか温水プール探検に来たのかわからない状況だった。よくもこれだけ多様なものを作ったものだ。毎日入りたいと思ったが、25NZ\$ (2125 円) はやや高い。

1630 風呂に入ったら夕食である。近くのスーパーで肉を買う。牛肉は約1kg で850円くらい。



焼いて、サラダ、パンと共にいただく。旨し。このようにニュージーランドの旅は単純な欲望に制御され進んでいくのであった。

(つづく)

『INCHの楽しい仲間たち』 vol.10 その1

会社より山小屋のほうが居心地がいいようで（その1）

土居将人（府中市）

小菅村からは奥秩父をはさんで反対側——上級者から初心者まで幅広い山好きに親しまれるハケ岳。主峰の赤岳からは諏訪湖、奥には北アルプスが見え、振り返れば雲に浮く富士山を見ることができ

る。気温は街に比べ10度ほど涼しいが、冬には-20度を下回ることもあり、人を吹き飛ばす激しい風が吹く。そんな場所にあるのが「天望荘」だ。

INCHのキャンプから繋がるこの山小屋バイトは、いろいろなものが見えてくる。今回はそういった山小屋の生活を紹介します。

◇忙しいとき、暇なとき

天望荘の1日のスケジュールは、4時から始まる。5時朝食、掃除と夕食の仕込みを終えたらひと段落して、昼に売食、風呂沸かしなど雑務をこなし、17時に夕食、スタッフの夕食は早くて19時で、21時に消灯する。朝、晩、そして昼の食事どきが忙しいので、合間をぬって休憩時間をつくり、シャワーを浴びたり昼寝している。また季節や天気によっても異なり、毎週末や長期休暇は休憩もとれないほど忙しいし、台風が来れば開店休業になる。

このように、毎日のルーチンに限れば意外と空き時間がある。問題は荷揚げのヘリ対応や遭難事故への対応などイレギュラーなことが起きること。一気にあわただしくなり、時にはお客さんに手伝ってもらいながら、どうにか営業している。



＜梅雨明けの赤岳展望荘。奥には富士山。＞

◇山小屋は千差万別

山小屋のイメージは人によって様々だ。木々に囲まれ、さびれた建物にランプが灯り、晴れた日には散歩に出かけ、通行客と気さくに話す・・・といっ

た牧歌的な印象をもつ人も多い。あるいは旅館のように何でも揃い、掃除が行き届き、気のいい女将が出迎えてくれると思うだろうか。いやいや考えたこともない、という人がほとんどだろう。

実際のところは小屋によって全く違うのだが、立地でおおよそ決まる。車でアクセスできる場所なら物資の運搬が容易なので、案内所が併設された旅館のようなものだ。ごはんも豪華だし、サービスの質もいだろう。一方で山の奥に建つ小屋は、飲用水が無かったり、ウナギの寝床のような相部屋だったり、不便や窮屈さが際立つ。この不便さが小屋によって様々であり、小屋の雰囲気も千差万別である理由でもある。当たり前にあるものが無い、それが山小屋と旅館の大きな違いだろう。

ちなみに天望荘は、水が無いので雨水を溜めて炊事、水洗トイレ、風呂に使っている。風呂に入れるのが本当にありがたい。照明が明るいので山小屋というより合宿所のようなのだが、ご飯が豪華で、一定の評判をもらっているようだ。



＜大晦日は食堂でお祭り騒ぎ。＞

◇恵みの水・天水

前述したとおり、携帯やテレビが使えない、コンビニもなければAmazonも届かない、と山小屋は生活の根本的な部分が制限されることが多い。特に大変なのは水がない場合だ。日本では1人が1日に使う水の量が200L弱、そのうち6割が風呂とトイレ、食事でも35L程消費するという。山では

池や川、湧き水、雪渓の雪解け水を使い、場合によっては消毒して飲むのだが、これがまた薬臭い。さらに稜線沿いでは雨水を溜めるほか無く、トイレの水洗どころか、食器を洗う水さえ十分ではなくなる。某小屋の食事はおでんと漬物で白米を食べる夕食で、カレーやハンバーグは「食器を洗えないから」断念したそうだ。山では雨水（あまみず）のことを天水（あまみず、てんすい）と呼ぶ。まさに天からの恵みだ。もし無駄遣いを見かけたら、声を荒げてしまうかも。

◇日々是勉強

小屋で生活する以上、掃除や料理は一通りできるようになる。さらに生活の知恵や「小ワザ」を知る機会が多いのも山小屋ならではの。スタッフの経歴は料理人、デザイナー、あるいは潜水土と様々だし、アウトドア派が多いためか趣味も幅広い。地元料理やお土産をふるまったり、ひもの結び方、倉庫の収納術などなど、ちょっとしたことに詳しくなる。

特に勉強になるのは人間関係だ。楽しく仕事できるに越したことはないし、トラブルが続けば営業もままならない。大切なことは「報・連・相」、これができれば大抵うまくいく。実際、私はこれが苦手で失敗することが多かったが、分からないことを聞くだけでもスムーズにいくようになった。そして報連相が苦手な人が多いのも確かだ。ぜひ身に付けておきたい。ちなみに山登りという限定された趣味ゆえか、横柄な態度をとるお客さんは少ない。困った客といえば台風のなか登ってきて下山できない、など知識不足によるものが多く、（それはそれで困るのだが…）若者だからと見くびられることも少ない。俗世から離れた環境ゆえに社会生活のスキルが身に着くとは、なんとも面白い。



< 昨年の台風 24 号で流された橋も、協力してかけ直す。 >

◇小話 山小屋は先行き不安

お客さんの食事はもちろん、スタッフの食事（従食）や資材を運ぶために、ヘリコプターが活躍する。天候に左右される不安定な方法でも、歩荷に比べればすばやく大量に物資を届けられる、不可欠な存在だ。そしてこのヘリの運行が、今年の初夏に機能不全をおこした。

山小屋のヘリ事情に関しては、雲ノ平山荘のブログから発信され、地元紙の1面にも取り上げられた。詳しくは調べて頂きたいが、要約すると「ほぼ一社頼みの状況で、ヘリ会社の機材と人員が減り、ついにパンクした」ということ。小屋開けが後ろ倒しになったり、開けても客食を提供できなかったり、燃料の備蓄が無くなる小屋もあった。南ハケ岳でも急遽歩荷でその場しのぎをする小屋もあったが、ほとんどの小屋は営業を続けられたようだ。現在は一時の混乱は落ち着いたものの、長期的にみてハイリスクローリターンなヘリ輸送の未来は不安が残る。

今の私が考えることは、山登りが出来なくなるかもしれないということ。山小屋は難易度に不相応な登山客でも登れるようにする補助施設でもあり、遭難があった時の駆け込み寺でもある。その山小屋がなくなれば、10年もせずに登山道が崩落し、事故が増えれば入山禁止になりうる。もしくは富士山のように入山金を徴収し整備に充てても、登山客じたいが減れば小屋の営業期間を短くせざるを得ない。いずれにしろ現状の快適さを維持することは、かなり大変なことだとみている。

山登りという趣味も、じつは多くの支えによって成り立っていた。その一端を担っていると思うと人ごとではないのだが、何もできない無力さも思い知る。小屋バイトにできることは、お客さんを見送ることだけだ。

(つづく)

土居将人：高校～大学でワンダーフォーゲル部所属。大学卒業後に勤めた会社より山小屋のほうが居心地がいいようで、実家にも帰っていない。最近 You Tube を使い始めた。

（事務局より）：土居くんは、ぬくい少年少女農学校、ちえのわ農学校、こすげ冒険学校の参加者でした。スタッフ経験ももちろんアリ。



○2019年の活動予定のお知らせ(秋～冬)

9/21-22 『INCHまつり・INCHライブ』 @小菅村 日帰り or 1泊2日

12/26-28 冒険学校『まふゆのキャンプ』 @小菅村 2泊3日

※トイレ棟づくりは仕上げ作業になります。涼しくなったら再開します～。

○ 事務局より

「7/24からトイレ工事の作業と冒険学校の準備のためキャンプ場入り、片付けの8/17までで25日間の長い夏でした。この後は、ナマステの編集、発送作業の準備、助成金の報告書づくりなど一人でできる事務仕事ばかり。

この夏に心に残った言葉は佐伯さんと話した時に出てきた「当事者意識」かな。これがあるかないか、これの深さによって物事への関わり方が決まってくる。私ならば小菅村の道路で落ちている目立つゴミは車を停めてでも拾う、小菅村民としての当事者意識(高め)。キャンプ場に落ちているゴミは常に拾う、事務局としての当事者意識(職業)。一方、政治には全然関心がない、当事者意識低め。ということで、自分の立ち位置をぼんやり考えてみたり。

この夏もおつかれさまでした～。 くらさわ

○ 事務局の麗しき日々

- ・尚子が久しぶりにキャンプスタッフ復帰。将来の村長に推す声も？
- ・翔くんは神楽の稽古のため週4で小菅に来ていたもよう。
- ・匠は貴重な有休を使って冒険学校を手伝っていたもよう。
- ・のんちゃんは午後～日帰り、早い帰宅の歴代2位の記録だったもよう。
- ・歴代1位は井上博喜で、脱臼して(事故ではない)日帰り。何しに来たの？
- ・キャンプ場のぼっこん便所は用済みになったもよう、ありがとう！
- ・宮崎のさぶちゃん家(田辺くん)に家族が増えたもよう。
- ・土居くんも、たまには実家に帰りなよ。
- ・木俣さんは古希を迎えて、車の運転を自主的にヤメたもよう。
- ・ひっしー&みやこは〇千万円のマンションを購入したもよう。
- ・佐伯さん、パスポートの期限はちゃんとチェックしようね！なもよう。
- ・佐々木さんの無職生活は半年で終了したもよう。
- ・小菅の湯が少々値上がりしたもよう(1日料金は値下げです)。
- ・小菅村に高級ホテルがオープン(タケと翔くんが住んでたところ)。

○ 自然文化誌研究会 一緒に活動しませんか？

略称 INCH(インチ)。冒険・伝承・創造をキーワードに『国際的な視野で人間をとりまく自然と文化を野外において探求する野外環境教育のパイオニア』として、40年以上にわたって活動を続けています。2004年からNPOとして再出発し、活動の中心を山梨県小菅村に移し、子どもを対象とした『冒険学校』や市民を対象とした『のびと講座』『ELF環境学習中堅指導者養成講座(のびと研修会)』などの山村の自然や文化を学ぶ活動を通じて、持続可能な社会を形成していく上で必須である環境学習の実践と農山村の振興を実現させるため、エコミュージアムづくりを行っています。

本会の運営は会員の皆様のご協力と、会費で成り立っています。ぜひとも会員の輪を広げていき、納入をお願い致します。本会の趣旨に賛同いただける方なら、どなたでも会員になれます。会員には以下8つの種類があります。なお、正会員のみが総会における議決権を持ちます。それ以外の会員は、総会にオブザーバー参加となります。会費は年額(1～12月)です。また、皆様からのご寄付も募っております。

正会員：10,000円 一般会員：5,000円

学生会員：3,000円 賛助会員(個人・団体)：10,000円

家族会員：6,000円 特別維持会員：100,000円

植物と人々の博物館友の会会員：3,000円

[雑穀街道特別会員\(小菅特別から変更\)：1口1,000円から](#)

成合基金(冒険探検基金)：「成合基金」と記載してください。

郵便振替口座：00100-2-665768

口座名：特定非営利活動法人自然文化誌研究会



ナマステ 137号

特定非営利活動法人 自然文化誌研究会 会報誌

<発行日>2019年9月10日

<編集>自然文化誌研究会 事務局

<発行> 特定非営利活動法人

自然文化誌研究会

The Institute of Natural and Cultural History

<事務局>〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 3337-2

TEL：0428-87-0165・090-3334-5328(事務局黒澤)

E-mail：npo-inch@wine.plala.or.jp

H P： <http://www2.plala.or.jp/npo-inch/>